Angle
―アングル―

「地元学」から地域活動への展開

愛媛大学
社会共創学部 特任講師
笠松　浩樹

はじめに

地域の資源を見出して活用に繋げる契機のひとつに「地元学」があります。「地元学」とは、地域住民と外部の人との対話によって普段の生活や生業に蓄積された知恵や思いを調べる試みです。その後に継続的な取り組みを展開することにより、交流活動、商品開発、定住促進などへの発展が十分に見込まれます。

本稿では、「地元学」の実践の経緯を紹介し、外部人材である大学が地域といかに関わり、活動につなげることができるのかを解説します。

「地元学」とは

本稿で取り扱う「地元学」は、「地元学ネットワーク」主宰の吉本哲郎氏の実践を指しています。「地元学」とは何かについて、吉本氏は「人が元気になる・自然が元気になる・経済が元気になる」ものと表現しています。

「地元学」の実践方法に決まった形はありませんが、多くの場合、図1のような手順で進めています。通常は、学生などの外部からやって来た「風の人」とそこに住む「土の人」が出会い、暮らしや生業を見たり聞いたりしながら詳しく調べます。「風の人」は、「土の人」に何かを教えたり指導したりはしません。「土の人」が自分の生活を語ることによって、そこに秘められた思い、知恵や技などを見つけていきます。「風の人」は、見聞きした事柄をありのままに文章や絵地図などで表現し、「土の人」達に発表します。その過程を通して、これまで何もないと思っていた地域や普段の暮らしにこそ価値があると気づかされ、「風の人」と「土の人」の間に共感が生まれます。

図1　「地元学」の進め方の一例。「土の人」の実感に接近することが大事。

筆者は、この過程で重要なのは、事柄の詳細の把握に終始するだけではなく、「土の人」の実感にできる限り接近することだと考えています。つまり、「地元学」とは地元の人の気持ちに寄り添う姿勢に他なりません。この点は、課題ありきで行う調査とは一線を画しています。

一般的に、外部者が行う地域現場での活動は、フィールドワーク、地域学、そして地元学とも称されることがあります。しかしここでは、地元の人の気持ちに寄り添うという認識から、括弧つきで「地元学」と表現させていただきました。なお、吉本氏によると、「地元学」の英訳は「Local Study」等ではなく「Jimotogaku」ということです。

1つの場所での「地元学」の実践は一

回限りで終わりません。「風の人」が何度も訪れることが重要になります。「地元学」を繰り返していくことで人々の暮らしや思いが深まり、「土の人」が自分達の暮らしに誇りを持ち、自信を取り戻すことにつながります。そこから交流活動やものづくりが始まることもあります。その場合、外部の人が主導して活動が実施されるのではなく、「土の人」の発案による自発的な活動であることが重要であり、「風の人」はそれを支えていく役割を担います。

「地元学」の実践

筆者は、2011年から農学部の授業で散発的に「地元学」を実践してきました。また、2013年からは愛媛大学・高知大学・香川大学とインドネシア3大学が連携したSUIJI（Six University Initiative Japan Indonesia）の一環で、両国の学生達が農山漁村に滞在するプログラムを行っており、この中でも「地元学」を行いました。

2016年に社会共創学部が発足してからは、「地元に学ぶ地元学」を企画してきました。これは、愛媛県内の高校生に参加を呼びかけ、大学生が授業として参加し、本学の社会人向けの講座である「社会共創クリエイター育成プログラム」の受講生も参加する、高校・大学・社会人が連携した取り組みです。2016年8月に西予市明浜町狩江地区へ73人が、2017年7月に同市城川町高川地区へ96人が「風の人」としてうかがいました（図2・3）。高校生や大学生が親や祖父母と同じような世代の人達とグループをつくって「風の人」となり、住民に話をうかがいます。「土の人」には話していただくことを事前にお願いする他に、地区内を歩いて出会った人に話を聞くこともあります。家の前にいた方と立ち話が始まり、成り行きで家に招かれてお茶をいただいたり、畑や家の様子を見させてもらったりすることもありました。

図2　西予市明浜町狩江地区での実践（2016）。聞いた話をまとめている様子。

図3　西予市城川町高川地区での実践（2017）。96人の「風の人」が集まった。

これまでに実践した「地元学」の事例をいくつか紹介します。

裁縫を生業とし、畑仕事が大好きな79歳のおばあちゃんと出会いました。50歳で着付け師範の資格を取って活動する傍ら、怪我をされたご主人の看病もして暮らしていました。そんな話を聞いていた学生の目が、おばあちゃんの手にとまりました。指を酷使して関節が変形した手でした。その手でたくさんの人を着飾った着物を縫い、道沿いを彩る花を育て、今も野菜づくりをしています。おばあ

ちゃんの手には語りきれないほどのドラマがあることに感動した学生は、「スーパーおばあちゃん」と題しておばあちゃんの日常や家族のことをまとめました。

「風の人」のグループが、畑で82歳のおばあちゃんに出会いました。農作業の話を聞いていると、10種類以上の豆を育てていることがわかりました。それらの種は買うのではなく、毎年自分で採種して翌年に播いています。流通している農産物のほとんど全てがF1種になっている昨今、貴重な自種や地野菜が残っていることを知りました。しかし、当の本人は昔からの方法を続けているだけで、貴重性を意識している訳ではありませんでした。そんなおばあちゃんを「豆名人」と名付け、蓄えている豆の写真を使って図4の発表資料を作成しました。

図4　「豆名人」のおばあちゃんの資料。自種が多く残っていることに驚き。

地域との継続的な関係づくりが重要

「地元に学ぶ地元学」は大がかりな企画として実施しています。そこに集う高校生や大学生、社会人は、「土の人」から身近でありながらも知らなかったことを学び、また、お互いを高め合う効果が出ています。また、話を聞いてまとめる過程で、コミュニケーションや仲間づくりも進みます。100人程度の「風の人」が歩き回ると、小さな地区では目立つうえに、多少なりとも盛り上げ役にはなるでしょう。しかし、「地元学」を年に1度のイベントとして実施しても、大した効果は見込めず、一過性のものとして終わってしまいます。

そこで、「地元学」前後の継続した取り組みが重要になります。狩江地区を例に挙げると、2013年からSUIJIによって狩江地区内部の渡江を中心に大学と地区の連携を行ってきました。この流れの延長に、日頃から学生と住民との交流がありました。2016年に「地元に学ぶ地元学」を行った後、2017年に社会共創学部の2年次必修科目「フィールド実習」を行いました。本科目では、45人の学生が日帰りと1泊2日の現地訪問を行い、農業、漁業、地質、観光、祭りや食、住民の集まる場などについてインタビューを中心に調査を行いました（図5）。この中で、海産物の加工について話が持ちかけられました。冷凍で取引をしている海産物を加工品にして、常温輸送ができる製品ができないかということです。これを受けた学生は、授業外で試作を重ねてオイル漬けを提案し、現在は地元での製造・販売が試みられています。

図5　社会共創学部「フィールド実習」。ジオガイドさんによる段畑めぐり。

終わりに

「地元学」には、共感を通して「土の人」と「風の人」の関係を紡ぐ役割があります。しかし、地域再生の万能薬ではなく、地区と継続した取り組みがあってこそ、具体的な活動につながります。

「地元学」は、住民と外部人材が相互に関わりを持つことで活動の入り口を広げます。その際に、最初から地域課題を解決する姿勢で関わるのではなく、住民の普段の暮らしの中で宝探しを楽しみながら、住民の主体性を育むものととらえることができます。